会員だより

趣味の手帳から

〝大和人〟の嗅覚

金沢大学学長　豊　田　文　一

（本文はＮＨＫ第１において、昭和52年３月12日、
「趣味の手帳」で放送したものである。

「こざ子ども、野蒜（ぴる）採みに、蒜採みにわが行く道の、かぐわしき花橘は」、これは古事記にあらわれた歌の一節であります。この「ニオイ」は、わが国の古代の一つの審美的感覚として、人々の心をとらえたものでありましょう。そして万葉集、古事記、風土記、日本書紀などをひもどけば、数限りなく、「ニオイ」が読みこまれ、ことにそのほとんど総ては花とのつながりであり、さきに述べました橘を始めとして、梅、桃、桜、卯の花、山吹、秋萩、あるいは松茸など「ニオイ」の対象として現われております。

またこの古代に書かれた詩歌や物語などから「ニオイ」に関連する言葉を選び出してみても数百になりましょう。例えば漢字として現われている「カオル」「カオリ」「ニオウ」などいい方の「ニオイ」の字にしても、それぞれ20以上も数えられます。これと反対に「カク」「クサシ」「ナマグサシ」など嫌われる悪い「ニオイ」にしても一寸数えただけでも30字位みつかります。このように同じ発音のうちにも文字の上からみて、古い時代の日本人には「ニオイ」に対する感覚的表現が豊かであったものと思われます。

ただこの詩歌などは、その頃の大宮人によって画き出されたに過ぎず、一般庶民の「ニオイ」についての感覚は動物的感覚に過ぎなかったものでありましょう。

わが国に限らず、他の国々でも、「ニオイ」に対して大きな関心がもたれ、倫理的、宗教的、論理的及び審美的の面から強調されていました。すなわち芳香、無臭は善、悪臭は悪の意味で用いられ、聖書にも「罰は天に対して臭う」とあり、わが国でも「あいつはクサイ」という言葉があります。宗教的には魂魄と香とは同一に用いられ、仏事には香を供え、キリストを埋めるとき芳香料が使われ、また聖者には芳香あり、妖精悪魔には悪臭ありとされています。論理的には鼻は「ニオイ」をかぐものでありますが、この「ニオイ」と知恵と密接な関係にあり、ローマに「彼は鼻を有せず」という格言があって、これは馬鹿を意味します。鼻は「ニオイ」をかぐ器官で、猟犬が獲物を追い、咥えてくるのは知恵であり、探偵が犯人を「かぎ出してくる」、これも知恵であります。審美的には前に述べましたように文字、芸術に広く用いられていることは皆さん御承知のことと思います。

さてわが国で庶民に、この「ニオイ」を高尚な感情として味えしめたのは、552年仏教の渡来以降で、仏教とともに香や香合の法が伝えられ、専ら仏前を清める材料として、寺院を始め仏教の儀式として供香の儀が行なわれ、このことは今日まで続いているわけであります。８世紀頃になり、実用面でもこのかぐわしい雰囲気を芸術的情操として部屋にたきこめ、着物に染めこんだりする風習が起こってきました。それを空薫物（そらたきもの）といって現在も残っ

ております。この風習が発達して薫物合せといって「ニオイ」をかぐ遊となり、歌合せや貝合せなどと一肪のつながりを有するようになりました。

さらに進むと、この薫物だけでは満足せず、種々のものを調整工夫、例えば練香（ねりこう）、これは香物を粉にして、そこえ動物性の香料、蜜などを入れて練り合せたものを作り、草花の名、文学、芸術、風月、動植物、名所旧蹟、儀式などの名を附し、しかもその「ニオイ」の優劣を競うだけでなく、銘の適、不適を論じ合うようになります。

これが香道という作法に移ってきたものであります。一定の作法のもとで香をたき、「ニオイ」の上で文学的雰囲気を観賞し、一つの芸道としての倫理的内容をもり、人間性を高めるものとして、宮廷文人の間に普及したものであります。

この普及も室町時代（1392—1573）に戦乱が打ちつづき、公家の力も弱まってきたため、香の催しが民間にも伝えられました。ここで作法の新しい様式も生まれ、御香所（ごこうどころ）、これは宮中の香木、及び香を司るものでありますが、この役目に当る三条西実隆を中心として宮廷人に、他方武家側は足利義政、志野宗信、文人では宗祇、肖伯などにより礼儀作法の体系がととのえられ、香道の基礎ができたといわれます。香道に茶道的要素が加えられていますが、これは18世紀以降で、香道に茶人の関心が高まった結果であります。当然の勢として専門家が選ばれました。公家の社会では三条西流、これは御家流ともいい、香と文学の関係に重きをおかれ、他方志野宗信の子孫が一流をなし、志野流とされ、これは作法が中心となしております。

この二流が今日まで、主な流派として名を残しているわけであります。この作法は茶道になぞられお手前とよんでおり、その香道具も種々のものを数えてみると40種を越えます。

香道の最盛期は、元緑年間（1688—1704）を中心とした前後で、華道、茶道と並んで庶民階級にまで広く及んだといわれます。しかし香木は高価であり、また江戸時代も鎖国がきびしくなりますと、中国や南方からの輸入が困難となり、その末期になると社会情勢が混乱し、香道と生活との結びつきがなくなり、次第にすたれてきました。それでも流れを汲む人々は、この作法を伝承し、その芸術的情操の普及につとめられています。

ところで、観点を変えて生物学的見地から「ニオイ」を考えてみましょう。動物の世界では「ニオイ」は生存のため大きな意義をもってきますが、人間生活では、これに比較すれば、それ程重要さはありません。この「ニオイ」を感ずる機能を嗅覚といいます。人間の嗅覚器は動物に比較すれば、遙かに劣っております。人間における役目は一応食欲の増進、有害物質防禦のための自衛装置などで、いわば松茸のあの「ニオイ」、すき焼のあの「ニオイ」、蒲焼のあの「ニオイ」がなければ全く味気ないものになります。また腐ったものの「ニオイ」、ガス洩れの「ニオイ」が感知できなかったら不測の事態を招き、生命の危険すらおびやかされます。

しかし動物の世界では、物体の認識や区別、種族保存のための生殖作用に大きな意義をもっています。このために嗅覚は不可欠のものであります。自己保存のため食物を求め、有害や不適当のものを避け、他方危険な動物から逃げ出さねばなりません。例えば狩猟について考えてみましょう。原始時代から人間は生活の糧をうるために、石、弓矢、槍を狩猟具として用いたが、獲物をとるために近ずかねばなりません。原始人は永い間に風下から近ずくことを覚えました。それは人の「ニオイ」が風によって運ばれれば、嗅覚の鋭敏な動物は逃げ去ってしまいます。現代的にいえば、生活の知恵ともいえましょう。ただし、人と人とが斗う場合は視覚によっているから嗅覚は問題にはなりません。勿論狩猟に限ら

ず、強力な敵をかぎ分ける能力をもっていますから、たとえ闇のなかでも逃げることができます。さらに動物の世界では、フエロモンという一種の「ニオイ」が分泌されます。これが仲間の信号、あるいは縄張りを示す合図となります。犬はよく放尿しますが、これは帰り途の道しるべや、他の犬に対して自己の存在を知らせることであります。

もう一つ、種族の保存であります。動物には一定期間交尾期があります。このときメスは特殊の「ニオイ」を分泌します。これによってオスを呼びよせます。ジャングルや原野のなかで遠く離れて単独の生活を営む場合でも、相手のメスを探し出すことのできるのは嗅覚です。羊のような動物が大集団で生活しているとき、そのなかの少数のメスが短期間発情しているものですが、その「ニオイ」によってオスが近ずき性的結合が行なわれるもので、聴覚や視覚は、ほとんど役に立ちません。またじゃ香鹿はオスの交尾期に性腺から特殊の「ニオイ」を分泌しメスを呼びよせる。その「ニオイ」のすばらしさはメス鹿だけでなく人までひきつけます。これらのことは生殖期における動物世界で共通のことといえます。

人間社会では、このような本能的ともいえる「ニオイ」の分泌はないが、化粧品では「ニオイ」は欠くことができないもので、数多い香水などが女性に愛用されています。これを動物の世界になぞらえれば、男性を魅惑する大きな要素にもなりうるものでありましょう。

さて私どもは「ニオイ」をかぎわけます。この「ニオイ」の種類は、ある学者によると約40万種あるといわれています。しかし実際にこれらをかぎわけることはむづかしいといわねばなりません。この感覚能力は個人的にも差異があり、心理的に鋭敏に影響されます。少し原始的かも知れませんが、大ざつぱに4つに分けることができます。その一はかぐわしい「ニオイ」、第二はすっぱい「ニオイ」、第三はこげくさい「ニオイ」、第四は不快な腐った「ニオイ」、まあこれ位は誰でもかぎ分けられる「ニオイ」であります。

もちろん「ニオイ」の快、不快は、それぞれの人によって程度が変わります。今から60年前、私の子供の頃、自動車の排気のガソリン臭がすきで、自動車の通ったあと、心ゆくまで吸いこんだ記憶があります。当時自動車の走行も少なく、そんなこともできたのでありましょう。

また最近悪臭公害が叫ばれています。悪臭の発生源は、パルプ工場、化学工場のような大規模発生源と魚腸骨の処理場、畜産業のような中小規模工場もありますが、苦情の広範囲のものから局所的のものまで多種多様であります。悪臭も一般的には、極めて多くの種類の成分よりなっておりますが、悪臭防止法では、アンモニヤ、メチルメルカプタン、硫化水素、硫化メチル、トリメチルアミンの5種類について規制されています。しかしこれらは化学的に判定し、規制されるもので、「ニオイ」の感覚は、心理的に大きな関係をもっており、人それぞれに判断のちがうもので、社会生活という観点に立った場合、もう少し考慮されるべきものでしょう。

それで、このような「ニオイ」の判定には数は少ないですが、調香師という特殊な専門技術者がおり、この人達は主として香料に関する仕事に従事しています。「ニオイ」に対して鋭敏な感覚をもっており、最近の悪臭公害の現場に立ち合って、それが水の悪臭であろうが、大気中の悪臭であろうが、その環境についての正確な判定を下しています。すなわち化学物質の分析も必要でありましょうが、人間としての生活面での快、不快の判断には、調香師と呼ばれる人々の認定に委ねるのも一つの方法でありましょう。

私どもは住みよい環境で生活したいものです。そのためにも人間の最も高尚な感覚ともいえるいい「ニオイ」の世界を身近かにただよわせてもらいたいと思います。